宗教教育部通信

No.５

《報恩講を迎えて》

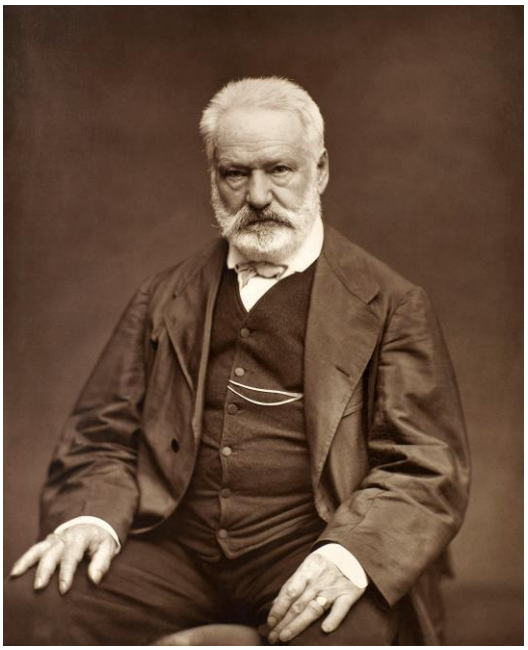
人生は、生、老、病、死

青春のほこりも

健康のよろこびも

栄華のたのしみも

一切は、人の世の虚しい影である



ビクトル・ユーゴーの詩である。

人の世に誕生した者すべてに約束されていること、それは、老いる、病む、死に至る事実である。

私が、億萬長者になる確率は、0.00……01%であろうが、私にとって老いは 100%であり、病むは 100%であり、死に至るのは 100%である。

老いは淋しさであり、病むは苦しみであり、死は恐怖である。これが、人と生まれたすべての者の通る道である。そのときどきに人は、立ち止まり、或いは、自らの無力におののき、泣き叫ぶしか手立てをもちあわせていないであろう。

しかし、この人生の道を、何の碍り（さわり）もなく歩みぬいた人々がいる。

釈尊がそのひとりであり、親鸞聖人もそのひとりである。

特に、釈尊の説かれた教えに導かれて、人間を超えた知恵と慈悲の、み仏とともに、歩む道を発見された親鸞聖人のご恩を偲ぶ日が、「報恩講」である。

※碍り（さわり）…碍りとは、煩悩のこと。